

モンゴル国で新たに確認された金属製の頭部結束具と頸部飾を伴う埋葬事例について

著者	大谷 育恵
著者別表示	OTANI Ikue
雑誌名	金大考古
巻	79
ページ	1-7
発行年	2021-03-31
URL	http://doi.org/10.24517/00061892



モンゴル国で新たに確認された 金属製の頭部結束具と頸部飾を伴う 埋葬事例について

大谷育恵

I. はじめに

筆者は以前、北魏・北朝並行期の遺跡より出土した金属製の頭部結束具と頸部飾を集成したことがある [大谷 2019]。頭部結束具とは死者の下顎骨が外れないように頭蓋骨と結束する葬具で、中国北部の北魏・北朝期の墓で近年報告事例が増加している。この葬具は主に中国人研究者によって考察されており、頭部結束具が寧夏のスグド人墓地から出土していることや、頭部結束具に伴う額帯の装飾文様など



図1 頭部結束具と頸部飾が出土した遺跡と参考遺跡(2～6世紀)

の点から、その非中国的な側面が注目されてきた。しかし前稿で問題としたのはそれら先行研究の東西交渉のとらえ方で、筆者は古代ギリシャ以来ユーラシアの東西で確認されている頭部を結束した埋葬事例の間に東漸を想定するのではなく、あくまで同時代である4～6世紀のユーラシア東部草原地帯で設定されてきた民族移動期考古学文化の広がりとしてとらえるべきであると考えている。

本稿ではまず、近年新たにモンゴル国で確認された頭部結束具と頸部飾を装着した埋葬事例を紹介することで資料を増補したい。そして、それら遺跡は「鮮卑期」として報告されており、モンゴル国の「鮮卑期」考古学の動向についても考察したい。

II. モンゴル国における頭部結束具と頸部飾の出土事例

前稿集成ではバヤンホンゴル県^{アイマク}ガルト郡^{ソム}の古墓で出土した頸部飾1点を紹介していたが [大谷 2019:132]、これまでモンゴル国では遺物の存在は確認できるものの、それを伴う遺構に関する情報は不明であった。下記の2遺跡の調査によって、遺構と遺物の両面から頭部結束具と頸部飾の使用が確認できるようになった(図1)。

1. シベート・ハイルハン・オール遺跡

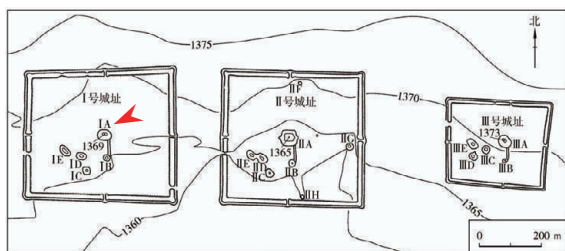
シベート・ハイルハン・オール遺跡(Шивээт



1. 4号墓

2. 5号墓

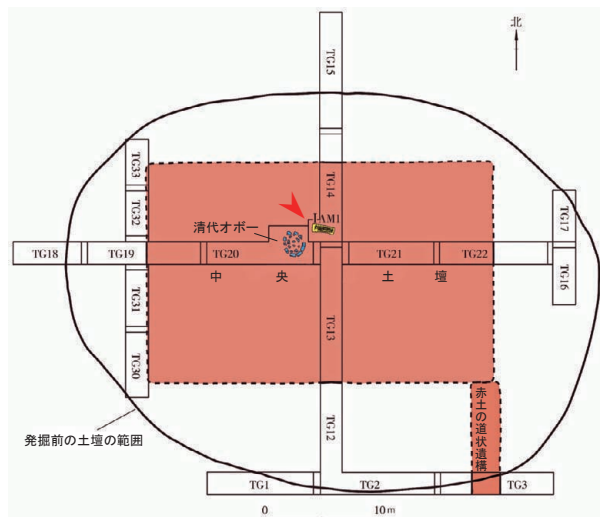
図2 シベート・ハイルハン・オール遺跡



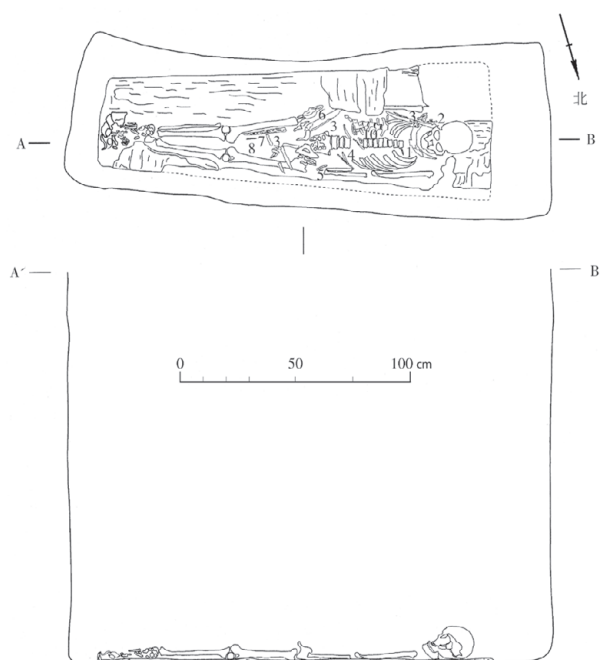
1. タリン・ゴルワン・ヘルム (I～Ⅲ号城址)



4. 頸部飾とその出土状況

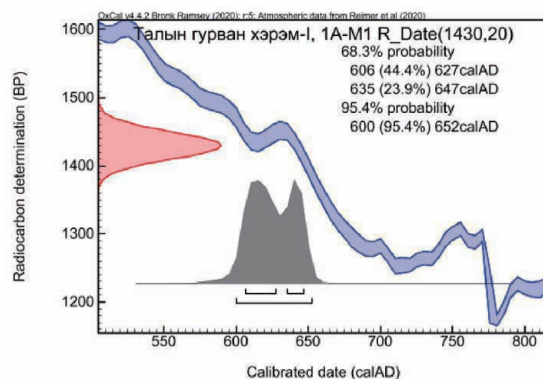
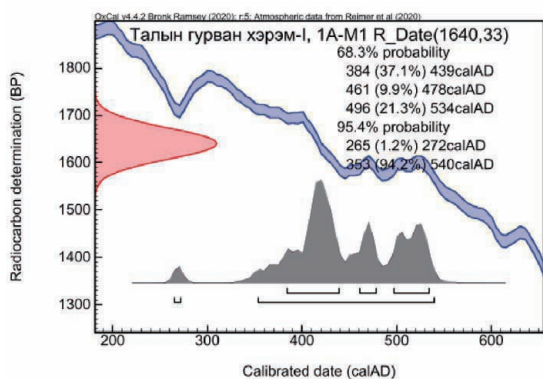


2. I号城址の中央土壇 (1A) と 1A-1 号墓



1. 青銅製頸部飾 2. 骨珠・玉珠 3. 弓弭 4. 化粧道具 5. 青銅腕輪
6. 皮革袋 7. 鉄剣 8. 鉄鏃 9. 陶罐 10. 羊頭骨 (犠牲)

3. 1A-1 号墓



5. 木棺の放射性炭素年代測定値 (左:COL3165.1.1[ケルン大学], 右:BA150063[北京大学])

図3 タリン・ゴルワン・ヘルム 1A 1号墓

хайрхан уул) は、バヤン - ウルギー^{アイマク}県ツェンゲル^{ソム}郡に所在する遺跡である。モンゴル科学アカデミー考古学研究所と韓国文化財庁は 2008 年から共同研究を実施しており、その一環として 2015 年から 2018 年まで発掘調査が実施された [Batbold et al. 2019: 123]。遺跡には初期鉄器時代からチュルク期に及ぶ様々な時代の遺構があり¹⁾、頭部結束具はそのうちの鮮卑期の墓 2 基から出土した (図 2)。

墓は共に円形の積石墓で、竪穴土坑の底に板石で作った石槨の中に被葬者を伸展葬していた。下顎の下をまわした青銅製の帯状金具の両端を頭頂で縛る「環形」タイプの頭部結束具である。

2. タリン・ゴルワン・ヘレム I 遺跡

アルハンガイ^{アイマク}県オギー・ノール^{ソム}郡に所在する。河谷平原に 3 基の土城が存在することから「平原の 3 つの城址^{タリン・ゴルワン・ヘレム}」と呼ばれる土城群で、西から東に I から III の番号が振られている (図 3-1)。蒙米共同調査 [Purcell & Spurr 2006: 27-29] の後、2014 年から蒙中共同発掘調査が行われている²⁾。

城址は匈奴期の遺跡であるが、I 号城址の中央土壇上に後代の墓 1 基があり (図 3-2) [内蒙古自治区文物考古研究所ほか 2015; 吉林大学考古学院ほか 2020]、被葬者は頸部飾を装着していた (図 3-3, 4)。墓は木棺を安置した竪穴土坑墓で、被葬者は 65 歳前後の老年男性である。木棺の放射性炭素年代測定が北京大学とケルン大学で実施されており、両サンプルでやや差のある結果を得たが (図 3-5)、報告者は出土遺物の特徴等から 4 ~ 6 世紀の墓と結論付けている [内蒙古自治区文物考古研究所ほか 2015: 38]。

頸部飾は青銅製で、前稿で II 型とした三日月の外側の弧線中央に方形の突出部がある形状のものである。保存状態が悪いが、頸部飾の表面には線状の幾何文装飾があるという。報告では言及がないが、被葬者頭部の右側³⁾から出土したという金製装飾金

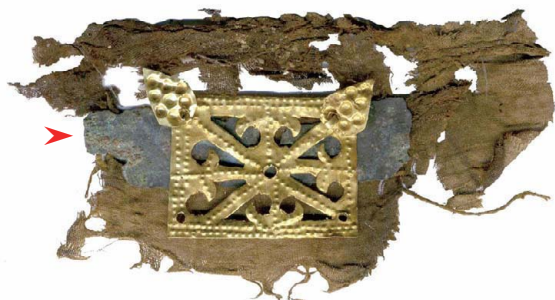


図 4 金製装飾金具、帯状の金具片、絹織物

具の写真には絹織物との間に青銅の帯状金具片が写っており (図 4)、頭部結束具の一部である可能性がある。

3. ガルト郡の古墓

1973 年にバヤンホンゴル^{アイマク}県ガルト^{ソム}郡の古墓から出土した資料であるという [Navaan 2004]。全面に菱形の切り抜きがあり、外周と一部の箇所³⁾に小孔があることから、何かに縫い付けられていた可能性がある。

III. モンゴル国における「鮮卑期」の遺跡

モンゴル高原において金属製の頭部結束具と頸部飾が出土した遺跡は以上の 3 遺跡である。このうち、シベート・ハイルハン・オール遺跡はその概報で「鮮卑期の遺跡」と報告されており、ここではそれが意味するところを考えてみたい。

モンゴル国の遺跡ならびに考古学の中で、「鮮卑期」という記載がみられるようになったのは比較的最近のことと感じている。以前より鮮卑との関連が指摘されることはあったが、それは隣接地域の研究を受けた 2 つの場面においてであった。

1 つ目は、ロシアならびに中国と境界を接するモンゴル国東部のドルノド^{アイマク}県周辺にも初期鮮卑の遺跡が存在したであろうという推測である。中国の鮮卑考古学では、内蒙古自治区呼倫貝爾市に拓跋鮮卑の第 1 期遺跡 (大興安嶺から大澤へ移動して居住した時期: 前漢末 ~ 後漢前期) が分布すると指摘されている [宿白 1977; 孫危 2004]。またロシア側でも、コヴィチェフがザバイカル地方のオノン川、シルカ川水系で匈奴 - 鮮卑期時代の遺跡を指摘している [Kovichev 2007]。ロシア側の遺跡と遺物が具体的に示されたわけではないため検討が進んでいないが、アムール川上流にあたるシルカ川、額爾古納^{アルグン}河水系に初期鮮卑と認識されている考古学文化の遺跡が

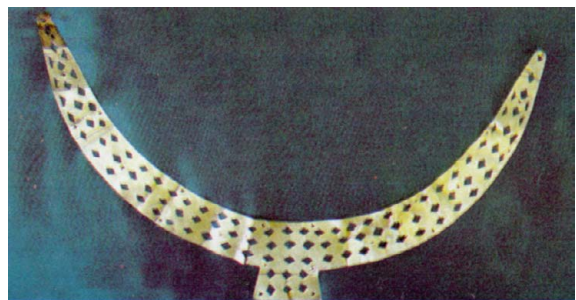


図 5 ガルト郡の古墓から出土した頸部飾

あり [臼杵 2004:156; 大谷 2012:330]、それはモンゴル国東北部にも及んでいるのではないかと具体的な形で指摘されているわけではないものの推測されている。

2つ目は、ノヴォシビルスクの考古学研究者の間でしばしばみられる「鮮卑」である。フデャコフは古代から中世にかけての遊牧民の考古学ならびに武器研究で著名な研究者であるが、氏が執筆した大学講義教材 [Khudyakov 2006] でもその語が出ている。教材は通史として南シベリアの紀元前 1 千年紀末～後 1 千年紀前半の考古学を理解する目的で書かれたもので [Khudyakov 2006:7-9]、ここでの「鮮卑」はチュルク系遊牧集団が勢力を拡大するより以前の時期という意味で置き換えることができるだろう。考古学において鮮卑時代という語を使用する点は独特であるものの、実際の章「鮮卑時代の南シベリア」の節構成はシベリア地域のおよそ後 1～5 世紀に相当する各考古学文化の概説になっており⁴、考古学の概説としては特異な点があるわけではない。したがって、ここでは中国考古学で特徴的な民族集団の鮮卑と遺跡との間で族属あるいは族源の比定と議論がされているわけではなく、また中国における鮮卑政権との具体的な時代的並行関係が意識されているわけでもない。史書には檀石槐だんせつかいの時に広大な匈奴故地を収めたという記載があり⁵、それに基づく広大な領域 (図 6) のイメージに基づいて、考古資料からみて唐代並行であることが確認できるチュルク期と漢代並行であることが確認できる匈奴期との間の時期を「鮮卑期」の名称で呼んでいるにすぎない。フデャコフはモンゴル国で発掘調査を実施していたこともあり、また彼を指導教授としたモンゴル国の研究者もいることから、このポスト匈奴・先チュルクの時期というイメージでモンゴルでも「鮮卑期」の語が使われ始めたものと思われる。



図 6 譚其驤『中国歴史地図集』より鮮卑の領域

ポスト匈奴・先チュルク期 (後 2～6 世紀) の遺跡を「鮮卑期」として報告した例に加えて、柔然期の遺跡として報告された遺跡もある。タリン・ゴルワン・ヘレム I 城址の 1A-1 号墓は、「史籍に記載された柔然の時期」 [内蒙古自治区文物考古研究所 2015:38] とするだけでなく、「年代は北魏に相当する時期であり、とりわけ柔然あるいは丁零・高車等の族群と関係する可能性が高い」 [吉林大学考古学院ほか 2020:35] とも指摘されているが、モンゴル国においてポスト匈奴・先チュルクの時期にあたる遺跡は発掘調査によってようやく具体例が確認されはじめた段階であり⁶、考古資料から族属比定の議論をする段階にはない。また、タリン・ゴルワン・ヘレム I 城址 1A-1 号墓と同様に柔然期として報告されている遺跡には、オールド・オラーン・ウネートオール がいそうぼ山の崖墓葬がある [Bayarsaikhan et al. 2016; id. 2017]。モンゴルアルタイ地域には岩窟や岩陰を利用して埋葬施設とした崖墓葬が存在し、その研究史についてはムンフバヤルがまとめているが、20 世紀初頭にブルドゥコフ (A. B. Бурдуков) の調査によって知られるようになった後、2000 年頃から調査が急増している [Mönkhbayar et al. 2019:41-42]。崖墓葬の大半はチュルク期以降の年代のものであるが、オールド・オラーン・ウネート・オール崖墓葬のように崖墓葬でも年代が古く遡る例が発見されるようになっており、今後の研究の進展が注目される。

チュルク期の遺跡と比較して指摘され始めた柔然期 (後 5～6 世紀) に対して、匈奴期の遺跡との比較からポスト匈奴期と認識される例もある。モンゴル国立博物館によって 2014 年より発掘調査が継続的に実施されているアイラギーン・ゴズゴル遺跡はオルホン県アイマクジャルガラント郡ソムに所在する墓地で、合計 97 基の墓が分布している [Odbaatar et al. 2019a; id. 2019b]。墓の構造は 2 種類に分かれ、甲字形 (T 字形) の護石墳丘をもつ大型墓 (図 7) と、円形の

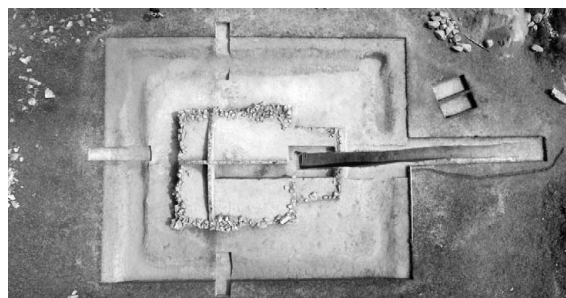


図 7 アイラギーン・ゴズゴル 40 号墳

積石墳丘をもつ中・小型墓とがある⁷⁾。匈奴大型墓に特徴的なT字形墳とは、地表構造物として方形の墳丘があり、その南に墳丘に向かって墳丘高が高くなる長方形の突出部がついた形である。アイラギーン・ゴズゴル遺跡の地上構造部はこれと同じT字形の墳丘であるものの、地下構造が異なっている。すなわち、匈奴大型墓の場合は地表面から掘り込むことによって長方形突出部分に相当する部分は斜坡道、方形墳丘に相当する部分は途中でテラスを設けながら段掘りして墓壙を設けた竪穴式であるのに対して、アイラギーン・ゴズゴル遺跡は横穴式で、天井をあけた長斜坡道を介して墓室にいたる洞室墓である。現時点で公表されている成果資料は概報と研究会口頭報告のみであるため、各墓とその副葬品を具体的に検討することはできないが、墳丘形は匈奴期大型墓の特徴をひき、墓の地下構造と出土遺物は明らかに匈奴期以降である墓が発見されたことは注目される。

IV. おわりに

本稿は、モンゴル国で新たに確認された頭部結束具と頸部飾を装着した埋葬事例を紹介した。これら金属製の頭部結束具と頸部飾はユーラシア東部草原地帯の4～6世紀の遺跡で確認されており、紹介したモンゴル国の出土資料もこの時期に該当する資料である。中央ユーラシアの考古学ではこの先チュルク期を民族移動期としてとらえることがあるが[林 2007:329]、モンゴル国では「鮮卑期」の名称でポスト匈奴・先チュルクの時期を表現している。モンゴル国の後2～6世紀の遺跡はようやく発掘調査を通して確認され、検討可能な資料が公表されはじめた段階である。それはチュルク期墓葬の副葬品より古い遺物を含むという認識から「鮮卑期」あるいは「柔然期」と指摘される遺跡や、アイラギーン・ゴズゴル遺跡のように匈奴大型墓の特徴を引いたポスト匈奴の遺跡もあり、今後モンゴル高原のこの時期の遺跡と研究の進展に注目してゆく必要がある。

註：

- 1) 各年に調査した遺跡の概報集である『モンゴル考古学』によると、2016年には初期鉄器時代の墓2基、2017年には初期鉄器時代の墓2基(うち1基が3号墓)、鮮卑期の墓3基(うち1基が4号墓)、犠牲供

献遺構9基、2018年には鉄器時代の墓3基(7, 8, 9号墓)、鮮卑期の墓4基(1, 3, 5, 6号墓)、鉄器時代とチュルク期の犠牲供献遺構各1基が調査されている[Batbold et al., 2019:123]。

- 2) 中国側の報告では「ヘルメン・タル城址」の遺跡名称で報告されているが、本稿は蒙米共同調査以降使われている遺跡名称に従った。三連城の表記もある。
- 3) 調査者による。
- 4) 鮮卑に関する部分「第3章 鮮卑時代の南シベリア」中の各節は、「1. 鮮卑と南シベリア、2. トウバのウルク-ヘム文化、3. コケリ文化、4. チャーティンスク文化、5. ブラン-コピンスク文化、6. コク-パシ文化、7. アイルダシ型文化、8. ベレリ型文化、9. タシュティク文化」である。タシュティク文化については堅昆に族属比定されたこともある考古学文化であり、単に年代的に並行する考古学文化が取り上げられていることが分かる。
- 5) 『三国志』烏丸鮮卑東夷伝第三十 鮮卑の裴松之註が引く『魏書』(王沈)に「檀石槐既に立ち、乃ち庭を高柳の北三百餘里、彈汗山の啜仇水上に為り、東西部大人皆歸す。兵馬甚だ盛んにして、南は漠邊を鈔め、北は丁令を拒み、東は夫餘を卻け、西は烏孫を撃ち、盡く匈奴の故地を據とす。東西萬二千餘里、南北七千餘里、山川、水澤、鹽池を罔羅すること甚だ廣し」。『後漢書』烏桓鮮卑列伝第八十にも同様の檀石槐が匈奴之故地を占めた記載がある。
- 6) 従来の認識では、「残念ながら草原地帯の東部に当るモンゴル高原ではこの時代に属することが確認される遺跡はまだ報告されていない」[林 1999:264]という認識であった。
- 7) 概報 [Odbaatar et al. 2016-2019]によると、2015年にはT字形墳2基(9, 11号墓)、円形墓5基(44, 51, 67, 81, 95号墓)、2016年にはT字形墳1基(86号墓)、2017年にはT字形墳2基(7, 89号墓)、円形墓1基(53号墓)、2018年にはT字形墳1基(40号墓)、円形墓(76, 93号墓)、2019年にはT字形墓2基(14, 45号墓)、円形墓3基(14A, 96, 97号墓)を調査した。

図版出典：

図1 著者作成

図2 1, 2. Batbold et al. 2019, p.128, tab. 9, 10

図3 1. 吉林大学考古学院ほか 2020, p.21 図2 加筆

2. 同上, p.24 図5 加筆
3. 内蒙古自治区文物考古研究所ほか 2015, p.34 図2
4. 同上, p.35
5. 内蒙古

自治区文物考古研究所 2015 の測定値を OxCal online で再校正

図 4 内蒙古自治区文物考古研究所 2015, p.35 図 8

図 5 Navaan 2004, т.29, зураг 8

図 6 譚其驤 1991:23-24 加筆

図 7 Odbaatar et al.2019a, т.226

引用・参考文献：

<日本語・中国語>出版年順

宿白 1977 「東北、内蒙古地区的鮮卑遺跡—鮮卑遺跡輯録之一」『文物』1977-5.

譚其驤 1991 『簡明中国歴史地図集』中国地図出版社.

林俊雄 1999 『中央ユーラシアの考古学』(世界の考古学 6) 同成社.

白杵勲 2004 『鉄器時代の東北アジア』同成社.

孫危 2007 『鮮卑考古学文化研究』科学出版社.

林俊雄 2007 『スキタイと匈奴 遊牧の文明』(興亡の世界史 2) 講談社.

大谷育恵 2012 「漢 - 北魏期における耳飾の展開とその画期—中国北辺を対象とした金属製装身具の研究 (1) —」『山口大学考古学論集Ⅱ』中村友博先生隊品記念事業会.

内蒙古自治区文物考古研究所・蒙古国游牧文化研究国際学院 2015 「2014 年蒙古国後杭愛省 烏貴諾爾蘇木^{アルハンガイアイマク オギーノール}和日門塔拉城址 IA-M1 発掘簡報」『草原文物』2015-2: 32-41.

大谷育恵 2019 「北魏・北朝並行期の遺跡より出土した金属製頭部結束具と頸部飾：ユーラシア東部草原地帯での広がりに着目して」『金沢大学考古学紀要』40 金沢大学人文学類考古学研究室: 123-140.

吉林大学考古学院・内蒙古自治区文物考古研究所・蒙古国游牧文化研究国際学院・内蒙古博物院・内蒙古師範大学 2020 「蒙古国後杭愛省 烏貴諾爾蘇木^{アルハンガイアイマク オギーノール}和日門塔拉城址発掘簡報」『考古』2020-5: 20-37.

<モンゴル語・韓国語>

Batbold N., Batsükh D., Bayarkhüü N., Nandintsetseg N. Батболд Н., Өмүрбек В., ^{Hwan byeon-yeong} 환 변 영, ^{Kim Keon-u} 김 건 우: Батсүх Д., Баярхүү Н., Нандинцэцэг Н., Өмүрбек Б., Хван Бүн Ён, Ким Кон Ву, 2018, Монгол-Солонгосын хамтарсан “Соёлын өвийг судалж хамгаалах” төслийн 2017 оны хээрийн шинжилгээний үр дүн, *Монголын археологи-2017*, УБ: 205-209. [「蒙韓共同“文化遺産を研究し保護する”プロジェクトの2017年田野調査成果」『モンゴル考古学 2017』]

Batbold N., Batsükh D., Bayarkhüü N., Өмүрбек В., ^{Jeong Seong-mok} 정 성 목: Батболд Н., Батсүх Д., Баярхүү Н., Өмүрбек Б., Жон Сон Муг, 2019, Монгол-Солонгосын хамтарсан “соёлын өвийг судалж хамгаалах” төслийн 2018 оны судалгааны үр дүн, *Монголын археологи-2018*, УБ: 123-128. [「蒙韓共同“文化遺産を研究し保護する”プロジェクトの2018年調査成果」『モンゴル考古学 2018』]

Batbold N.: 바트볼드 N., 2019 「한·몽 “문화유산의 연구 및 보존 공동연구 프로젝트” 고고학 연구 10 주년 (2009-2018)」『문화유산 연구 및 보존 : 한몽 공동연구 학술심포지엄』대한민국 문화재청 국립문화재연구소·몽골과학아카데미 역사학고고학연구소: 45-67. [「韓・蒙「文化遺産の研究および保存共同研究プロジェクト」考古学研究 10 周年 (2009-2018 年)」『文化遺産研究および保存: 韓蒙共同研究学術シンポジウム』大韓民国文化財庁国立文化財研究所・モンゴル科学アカデミー考古学・歴史学研究所]

Bayarsaikhan Zh., Tüvshinzhargal T., Bayandelger Ch.: Баярсайхан Ж., Түвшинжаргал Т., Баяндэлгэр Ч., 2016, Ховд аймгийн мянгад сумын “Урд улаан үнээт” ууланд хийсэн хадны оршуулгын малтлага судалгаа, *Монголын археологи-2015*, УБ: 86-89. [「ホブド^{アイマク}県^{ソム}ミャンガド郡の“オールド・オラーン・ウネート”^{オール}山で実施した岩窟埋葬の発掘調査」『モンゴル考古学 2015』]

Bayarsaikhan Zh., Tüvshinzhargal T., Bayandelger Ch., Mönh L.; Ваярсайхан Ж, Түвшинжалгал Т., Баяндэлгэр Ч., Мөнх Л., 2017, Ховд аймгийн Мянгад сумын нутаг Урд улаан үнээт уулын дурсгал, *Хадан гэрийн соёл*, УБ: 7-30. [「ホブド^{アイマク}県^{ソム}ミャンガド郡に所在するオールド・オラーン・ウネート・オールの遺跡」『岩の墓室の文化』] Khudyakov Yu. S.: Худяков Ю. С., 2006, *Археология Южной Сибири хунно-сяньбийской эпохи (учеб. пособие)*, Ноб: Нобосибирский государственный университет. [『匈奴 - 鮮卑時代の南シベリアの考古学 (学習参考書)』]

Kovichev E. V.: Ковычев Е. В., 2006, Некоторые вопросы этнической и культурной истории Восточного Забайкалья в конце I тыс. до н. э. — I тыс. н. э., *Известия лаборатории древних технологий*, вып.4, Иркутск: Изд-во Иркутского государственного технического университета. [「紀元前 1 千年紀—紀元後 1 千年紀の東ザバイカルの民族的・文化的な歴史の若干の問題」『古代技術研究所研究』4 巻 国立イル

ケーツク工科大学]

Mönkhbayar Ch., Pürevdorj G., Vyambasüren Kh., Sükhbaatar B.: Мөнхбаяр Ч., Пүрэвдорж Г., Бямбасүрэн Х., Сүхбаатар Б., 2019, Үзүүр гилэнгийн морьтой оршуулгын малтлага судалгааны зарим үр дүн, *Түүхийн товчоон*, Т. 10, УБ: 41-93. [「ウズール・ギャランの馬殉葬埋葬の発掘調査部分報告」『歴史総報』10]

Navaan D.: Наваан Д., 2004, *Алт эрдэнэсийн дурсгал*, УБ. [『黄金財宝』]

Ochir A., Mandakhbayar G., 陳永志, 薩仁畢力格, 程鵬飛: Очир А., Мандахбаяр Г., Чен Ён Жи, Саранбилэг, Чэн Пен Фей, 2019, Монгол-Хятадын хамтарсан «Монгол улсын нутаг дахь эртний нүүдэлчдийн археологийн хайгуул, судалгаа» төслийн 2019 оны ажлын товч үр дүн, *Монголын археологи-2019*, УБ: 170-175. [「蒙中共同“モンゴル国に所在する古代遊牧考古探査と調査”プロジェクトの2019年活動成果」『モンゴル考古学2019』]

Odabaatar Ts., Enkhbold S., Bүrentögs G.: Одбаатар Ц., Энхболд С., Бүрэнтөгс Г., 2016, Айрагийн гозгорт явуулсан археологийн малтлага судалгааны урьдчилсан үр дүн, *Монголын археологи-2015*, УБ: 162-164. [「アイラギーン・ゴズゴルで実施した考古発掘調査の予備成果」『モンゴル考古学2015』]

Odabaatar Ts., Egiimaа Ts.: Одбаатар Ц., Эгиймаа Ц., 2017, 2016 онд Айрагийн гозгорт явуулсан археологийн судалгааны танилцуулга, *Монголын археологи-2016*, УБ: 260-261. [「2016年にアイラギーン・ゴズゴルで行った考古調査報告」『モンゴル考古学2016』]

Odabaatar Ts., Bars M., Nyambat M., Amgalanbat B.: Одбаатар Ц., Барс М., Нямбат М., Амгаланбат Б., 2018, 2017 онд Айрагийн гозгорт явуулсан археологийн судалгаа, *Монголын археологи-2017*, УБ: 230-233. [「2017年にアイラギーン・ゴズゴルで行った考古調査」『モンゴル考古学2017』]

Odabaatar Ts., Dabaatseren B., Nyambat M., Bars M., Enkhbayar G.: Одбаатар Ц., Даваацэрэн Б., Нямбат М., Барс М., Энхбаяр Г., 2019, Монгол-Хятадын хамтарсан «Айрагийн гозгор дахь эртний нүүдэлчдийн археологийн судалгаа» төслийн 2018 оны хээрийн судалгааны ажлын товч үр дүн, *Монголын археологи-2018*, УБ: 221-226. [「蒙中共同“アイラギーン・ゴズゴルの古代遊牧民の考古学調査”プロジェクトが2018年に実施した調査概報」『モンゴル考古学2018』]

Odabaatar Ts., Nyambat M., Davaatseren B., Bars M., Enkhbayar G., Erdenebayar B., 魏 堅: Одбаатар Ц., Нямбат М., Даваацэрэн Б., Барс М., Энхбаяр Г., Эрдэнэбаяр Б., Вэй Цзян, Төрбаяр Ц., 2019, Орхон аймгийн Жаргалант сумын Айрагийн гозгорт явуулсан судалгааны ажлын танилцуулга, *Монголын археологи-2019*, УБ: 263-268. [「オルホン県ジャルガラント郡のアイラギーン・ゴズゴルで実施した調査の概要」『モンゴル考古学2019』]

Purcell David E., Spurr Kimberly C., 2006, Archaeological Investigations of Xiongnu Sites in the Tamir River Valley (Results of the 2005 Joint American-Mongolian Expedition to Tamiryn Ulaan Khoshuu, Ogi nuur, Arkhangai aimag, Mongolia), *The Silk Road*, vol. 4-1, Saratoga (U.S.A): The Silkroad Foundation: 20-32.

<研究動向> 崖墓調査の進展

2017年5月から2か月間、モンゴル国立博物館で特別展「岩の墓室の文化」が開催され、展示図録が刊行されている。特別展はホブド県^{アイマク}ミャンガド郡^{ソム}のオルド・オラーン・ウネート・オール崖墓墓と同県ムンフハイルハン郡^{ソム}のウズール・ギャラン崖墓墓(Үзүүр гялан)から出土した資料を展示した展覧会であり、乾燥ミイラと共に両墓から出土した保存状態が良好な馬具、衣類などの出土資料は大きな関心をよんだ(図録表紙にも掲載されているウズール・ギャラン崖墓墓のブーツは「崖墓墓から出土した“アディダス”の靴」として報道がなされた。上の写真はオルド・オラーン・ウネート・オール崖墓墓出土の鞍)。なお、モンゴルアルタイで多く確認されている崖墓墓、そしてチュルク期に特徴的な墓として指摘されてきた被葬者の隣に馬を陪葬した馬殉葬墓の調査・先行研究については、近年ムンフバヤル[Mönkhbayar et al. 2019]がウズール・ギャラン崖墓墓の報告の前置きとしてまとめている。(大谷)

